

おたがいサマサマ わやくちゃチャチャチャ 2025年1月7日放送分

ナレーター：『おたがいサマサマ わやくちゃチャチャチャ』

♪俺たちの明日／エレファントカシマシ

ナレーター：この番組は、『グッドニュース情報発信塾』の提供でお送りします。

のぶ：皆さん、こんにちは。手話エンターテイメント発信団 oioi ののぶです。

りょーじ：同じくりょーじです。

のぶ：さあ、今日から始まりましたこの番組、毎月、月替わりで、様々な背景や様々な価値観を持った出演者が、自ら企画し、自らゲストまでブッキングして、勝手気ままなおしゃべりと好きな音楽をかけちゃおうというものです。

りょーじ：そうですね。僕らも今まで何回かラジオには出させていただいているんですけど、こうやってパーソナリティとしてやるのは初めてですね。

のぶ：そうですね。今までやったら、聞かれたことに答えていくという感じだったんですけど、自分で回さないといけないとなるとすごく緊張しますよね。

りょーじ：緊張しますね。さあということで、まずは、栄えある第1回目となる今月の担当を務める我々の自己紹介から始めましょう。

のぶ：おお。

りょーじ：私たちは手話エンターテイメント発信団 oioi といいます。

のぶ：はい。この団体は何かといいますと、きこえる人ときこえない人之间にある心のバリアをぶっ壊すために、手話を使ったエンターテイメントの発信活動を行っているんですね。

りょーじ：はい。

のぶ：そんな僕たちの願いは何かというと、それは、手話を世の中に広めていくということなんですが、普通のやり方ではなかなか手話に興味を持ってもらうことができません。なので、僕たちは考えました。どうしたらたくさんの人たちが手話に興味を持ってもらえるんだろうかと、考えて考えて考えた結果、「そうだ、手話を使って楽しいことをやろう」と思って、今は手話を使ったコントだとか、ワークショップだとか、あらゆるものにエンターテイメントの要素を盛り込んだものをやらせていただいております。

りょーじ：はい。では続いてね、僕たちの自己紹介をこのままさせてください。

のぶ：はい。僕の名前は、“のぶ”といます。

りょーじ：そして僕の名前は、“りょーじ”です。

のぶ：まあ、今こんなふうになめちやくちゃ喋っているんですけども、実は2人とも、生まれた時から聴覚障害者なんです。

りょーじ：そうなんです。きこえてないですよ、ほんとにね。

のぶ：すごい喋るけど、きこえてないという不思議な話ですよ。

りょーじ：はい。

♪★、🔔、♪・ (～♪)

のぶ：ここでディレクターからの指示が出ましたね。

「聴覚障害者なのに、なんでそんなにおしゃべりできるんですか」という質問をいただきました。

りょーじ：その質問に・・・

2 人：アンサー！！

のぶ：いや、僕の場合は、ろう学校っていうきこえない子どもが通う学校があるんですけども、そこの幼稚部で発音の訓練を受けておりました。基本的には、口の動かし方、そして舌の動かし方というのを、手を使って覚えさせられたんですね。ちょっと言葉で説明するとあんまりイメージしづらいと思うんですけども、分かりやすく言うと、「らりるれろ」の動きというのは、舌が歯の上の方の裏についた状態で、上から下に下ろすのが「ら行」の発音になると思うんですね。これを、手の動きと一緒に覚えて、実際に喋っていくという練習を何回もさせられてたんですね。

りょーじ：なるほど、なるほど。

のぶ：でも、りょーじの場合はちょっと違うんですよ。

りょーじ：そうなんです。僕のやり方はちょっと違って、僕は手の動きではなくて、「ミルクせんべい」というお菓子を使ってたんですね。

のぶ：ほう。ミルクせんべい。

りょーじ：ミルクせんべいっていう甘いお菓子があるんですけど、このミルクせんべいを、例えばさっきの「らりるれろ」の発音だったら、ミルクせんべいを割って上あごに引っ付けて、そのミルクせんべいをなめながら「ら・ら・ら・ら・ら・ら」と、なめながら舌の動かし方を覚えるっていうのをやりましたね。で、あとは僕の家族は4人家族で、お父さんとお兄ちゃんが耳がきこえなくて、お母さんだけが耳がきこえるっていう家庭だったんですけど、お家の中にはいろんな物にその物の名前が書いてあるカードがいっぱい貼ってあって、例えば僕が冷蔵庫を開けようと思ったら、「待って。これ何て書いてある？」ってお母さんに聞かれて、僕が「れいぞうこ」ってはっきり言えたら開けて OK みたいなルールがね、変なルールが我が家にはあったんですね。

のぶ：なるほどね。お母さんがきこえてる。

りょーじ：そうです、そうです。なのでそれでいろいろチェックしてもらって、僕は色々な物の名前と合わせて、その発音の仕方をちょっとずつ覚えていくっていうのと、もう一つ。絵本をいっぱい読んでたんですけど、その中の 1 つだけ発声練習用の絵本っていうのが決まって、これを僕が頭から最後まできれいに喋れたら終わって OK。途中で何かつまずいたら、もう 1 回最初に戻って読み直し、っていうことを、ひたすらやっておりました。

のぶ：なかなかスパルタな内容で。

りょーじ：スパルタに育てられたんです。それを楽しみながらチャレンジして、やっている内に、ちょっとずつ喋れるようになっていたらしい。はい。

のぶ：そんなりょーじは、手話はいつから勉強を始めたの？

りょーじ：僕が手話を始めたのは、実は、生まれた時から耳がきこえないんですが、手話を始めたのは、大学生になってからなんですね。

のぶ：それまでは手話をやろうとは思わなかった？

りょーじ：そうですね。お父さんもお兄ちゃんも耳がきこえないんですけど、ずっと、口話というんですけど、口の動きで発声しながら話すっていうコミュニケーションをとっていたので、身の回りに手話を使う人もいなくて、手話と出会うきっかけがずっとなかったんですよ。だから大学に入って手話を僕は始めました。のぶの場合は？

のぶ：僕の場合もりょーじと同じで、生まれた時から耳のきこえない家庭で育ったんだけど、ちょっと小さい時の自分というのは、自分が耳がきこえないということがすごい嫌だったんで、手話が恥ずかしいなと思ってたし、もう家族が手話を使って喋ってるのを見ると「ああ、もうやめてやめて、手話使わんといて」って思ってた時期もあったぐらいなんだけど、大学に入った時に、何かちょっとね、やりたいことが特に見つからず、このまま何もなく大学生活 4 年間を終わらせちゃうのかなと思った時に、それだけは嫌と思って、最後の最後に、しゃーなく入ったのが、手話サークルだったんですけども。

りょーじ：「しゃーなく」なんですね。

のぶ：そうそうそう。しょうがなく入ったんだけど、結果としてはすごく入ってよかったなと思って、何かやっぱりちっちゃい時から身の回りに手話があったからか、なんとなくみんなが手話を使って喋っているっていうのが、すぐ理解できる感覚っていうのがあって、これが、高校までの間って、ずっとみんなが喋ってる内容を、口の動きを読み取って理解しないといけないっていう、もうすごいしんどい生活だったのが、手話だったら、頑張らなくてもみんなの喋ってる内容がわかってくるっていうところが、すごい楽だなと思って、もうこの楽しみを知ってからは、とことん手話にはまっていく生活でしたね。

りょーじ：なるほど、なるほど。今ちらっとお話があったんですけど、僕も、ずっと小中高と、ずっと一般の学校に通ってたんですけど、のぶは幼稚部の時だけろう学校？

のぶ：そうそうそう。幼稚部の時だけろう学校に通ってて、小学校から小中高大学まではずっと普通の学校に通ってました。

りょーじ：なるほど。のぶの家族は全員耳がきこえない？

のぶ：そうそうそう。全員耳がきこえないから、りょーじの場合は、お母さんが、りょーじが喋ってる発音ができるかどうかっていうのをチェックしてもらえたと思うんだけど、自分の場合は、親も姉もいるんだけど、家族全員耳がきこえないから、家の中でどれだけ喋っても、誰も正解がわからないというね。

りょーじ：ああ、確かにね。

のぶ：だから、とにかく、学校で喋って喋って喋って、友達が「ん？」っていう表情をしなかったら、多分うまくしゃべれているんだろうなという自己判断で。

りょーじ：なるほど、なるほど。

のぶ：ほぼほぼ自己判断でやってましたね。

りょーじ：わかります、わかります。なんか周りの反応を見て「あ、今のはちょっと喋り方が違ったんやな」とか、「変な言い方になってたんやな」というのを、なんとなく察して、次に言う時にはなんか気をつけるみたいなことがありますよね。

のぶ：あるあるある

アラーム：時間です。時間です。

のぶ：お、ちょうど。もうあつという間に時間が迫ってまいりましたね。

早速1回目どうでしたか？

りょーじ：そうですね。僕は、今まで「なんでこんなに喋れるの」というふうにかかることもいっぱいあって、今日はなんかいろいろと喋れる理由っていうのを、本当はちっちゃい時に色々やってたからなんだよっていうことをお伝えできてよかったなというふうに思います。

のぶ：確かにね。自分のことを話す機会があんまりないから、こういう機会があるのはほんまありがたいですね。

りょーじ：ありがたいですね。

のぶ：さあ、この番組では毎回我々のリクエストした曲をかけてくれるそうなんですけども、今日のこの歌は？

りょーじ：はい。僕りょーじが選びました。

のぶ：この曲を選んだ理由は何なんですか？

りょーじ：はい。僕はこのoioiに15年前に入ったんですけど、そのoioiで初めてやったパフォーマンスをやった時の歌が、この歌なんですよ。

の ぶ : おお。

りょーじ : デビューソングでございます。

の ぶ : おお、素晴らしい。では、それでは、タイトルコールをお願いします。

りょーじ : はい。槇原敬之さんで、『どんなときも』

の ぶ : おお、ありがとうございます。それではこの曲をおかけして、今週は終了となります。来週も同じお時間にお耳にかかりましょう。

2 人 : さようなら～！！

♪どんなときも／槇原敬之